

有志舎 略年表

年	永滝の年齢	事 項
1964年～86年	0～22	社長・永滝は東京都杉並区高円寺生まれ。祖父は戦前・戦中に満鉄・華北電電・中華航空といった国策会社に電信技士として勤務。父も幼少期に祖父の勤務先異動に従って満州・華北・台湾で生活していたため(敗戦時は台湾在住で46年3月に引き揚げ)、その頃の話が子供の時からしつこく聞かされる。その結果、「そもそもなぜ日本はアジア各地を侵略したのか」に興味を持つようになり、大学は青山学院大学文学部史学科(日本近代史専攻)に進学。
1987年	23	3月に大学を卒業。4月より株式会社 吉川弘文館出版部に入社。 主に、単行本の編集・制作実務に従事。主な企画としては、シリーズ「近代日本の軌跡」、「ニューヒストリー近代日本」など。特に、田中彰・由井正臣・中村政則先生から、「歴史書編集者として日々の歴史学の勉強がいかに大事か」を教わる。
1999年5月	35	吉澤南著『ベトナム戦争：民衆にとっての戦場』を刊行。この本の企画・編集の過程で、「戦争史を国家間の政治・外交・軍事史に矮小化せず、一人ひとりの民衆にとって戦争とは何だったのかを考える」「戦争批判のための歴史学とはどうあるべきか」というテーマについて、吉澤さんと話をし、その歴史学に臨む姿勢から大きな影響を受ける。
2001年～2003年	37～39	大門正克・安田常雄・天野正子編『近代社会を生きる』『戦後経験を生きる』(「近現代日本社会の歴史」全2巻)を企画・編集(刊行は吉川弘文館退社後の2003年12月)。編集の過程で大門さんとこれからの歴史学の在り方についてなどを語り合うようになった。
2001年頃	37	この頃から、永滝にとって「出版していきたい歴史書」の方向性が大きく変わるようになった。「歴史学のポジショナリティ」から「歴史学のリアリティ(アクチュアリティ)」へ。学問としての先端性にばかり注目するのではなく、現代社会に生きる一人ひとりの人間にとって大事になるような歴史学の追究、そういう歴史書の出版をしていきたいとの思いへ。
2002年頃	38	吉川弘文館を退社して独立するべきかどうかを大門正克さんに相談(唯一の相談者であった)。
2003年3月	39	吉川弘文館を退社。
		個人事業として屋号を有志舎とし、出版社設立の準備を開始。著者への執筆依頼をしつつ、吉川弘文館・日本経済評論社・山川出版社・みすず書房などから外注仕事(出版物の編集・校正)を受注した。
2005年11月1日	41	有限会社 有志舎を法人登記・設立(事務所は神保町)。出資者(社員)は永滝稔と父・永滝勇。勇は経理担当、その他の業務は稔が担当。 基本的に近現代史(日本に限らず)の歴史学術書の出版を行っていく事とした。 ただし、この頃は個人事業時代から請け負っていた外注仕事(他社出版物の編集・校正)を継続しつつ、自社出版物も企画・編集・刊行していく体制。 取次会社のJRC・八木書店と契約。のちにトーハンとも契約し、現在に至る。なお、この頃はトランスビューの「取引代行」はまだ無かった。
2006年3月	42	黒崎輝著『核兵器と日米関係』を刊行(版元として発行・販売した最初の出版物)。2006年度「サントリー学芸賞」受賞。
2006年6月	42	三谷博著『明治維新を考える』を発刊、以後、2007年2月までに6刷となる。同年、家近良樹編『もうひとつの明治維新』も重版(2007年2月までに4刷)となる。吉川弘文館時代から参加していた明治維新史学会との連携を視野に入れつつ、以後、維新史関連書籍の出版にも注力。
2007年	43	「帝国と思想」研究会(米谷匡史さん・戸邊秀明さんなど、若手思想史研究者による自主研究会。永滝も誘われて参加)にゲストで来た趙景達さんと出会う。すぐそのあとに単著を依頼。2008年に『植民地期朝鮮の知識人と民衆』として刊行。以後、多くの朝鮮近現代史・日朝関係史関連の著編書を刊行いただくことになり、さらに若手の研究者もご紹介いただく。朝鮮近現代史の本の出版へ。
2008年頃	44	外注仕事をすべて辞退し、自社の出版物のみで経営していく事とした。
2010年12月	46	明治維新史学会編「講座 明治維新」全12巻を発刊開始(完結は2018年)。
2013年1月	49	原田敬一著『兵士はどこへ行った：軍用墓地と国民国家』刊行。戦争批判のための軍事史として出版。
2013年6月	49	シリーズ「問いつづける民衆史」編集のための研究会発足(最初に相談した一人が慎蒼宇さん)。2024年に第一巻である慎蒼宇著『朝鮮植民地戦争』発刊。
2013年10月	49	趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編「講座 東アジアの知識人」全5巻刊行開始(完結は2014年5月)。
2015年10月	51	藤野裕子著『都市と暴動の民衆史』発刊(以後、2021年までに6刷。現在は品切)。同書は2015年度藤田賞(後藤・安田記念都市研究所)受賞。
2017年4月	53	神保町から高円寺に事務所を移転。
2019年1月	55	細谷亨著『日本帝国の膨張・崩壊と満蒙開拓団』刊行。
2021年	57	「街中(地域)から学術や「知」を広めていく」をテーマに、高円寺で学術書に関する読書会やトークイベントを開始。
2024年7月	60	慎蒼宇著『朝鮮植民地戦争』(シリーズ「問いつづける民衆史」第一巻)発刊。
2024年11月	60	「高円寺 本の街商店会」(高円寺を神保町と並ぶような「本の街」にする活動)の役員就任。
2025年	61	創立20周年。